



[リサーチ・ショーケース/展示構成]

イントロダクション | ムン・キョンウォン

A | アーカイヴ・パート

A1 | 「St1.0——《庭》の石から公園へ」

原 瑠璃彦(東京大学、日本学術振興会)

A2 | 「千年村プロジェクト」

千年村運動体

A3 | 「1973年のニューヨーク、セントラルパークを辿る」

西 翼(アシスタント・キュレーター、YCAM)

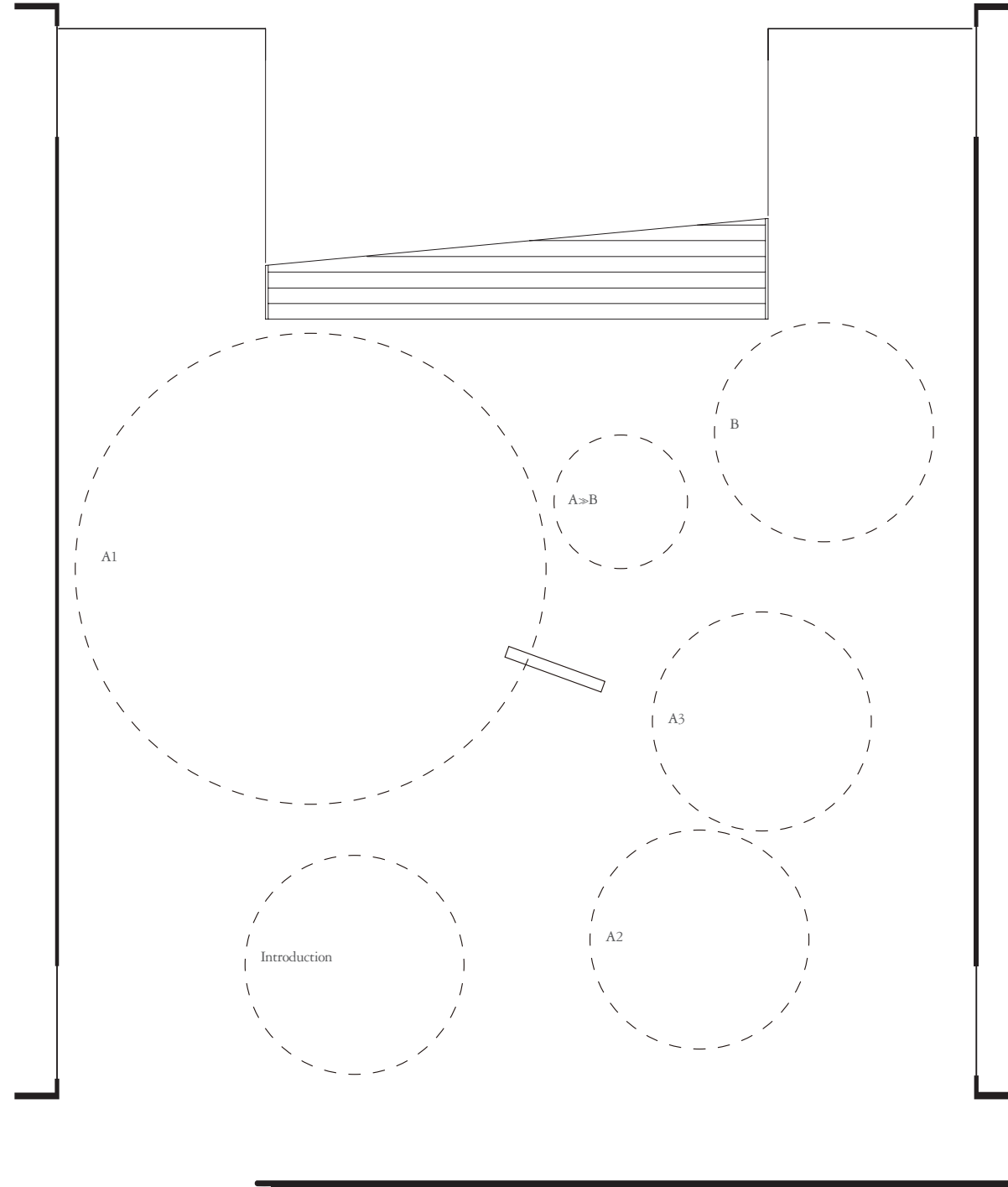
AからBへの接合 | 芸術史にみられる空中庭園、浮遊する空間

阿部 一直(チーフ・キュレーター、YCAM)

B | フューチャー・パート

「未来の知覚——人間と技術の境界」

YCAM InterLab



- A | アーカイヴ・パート

[ゲスト・リサーチャー/プロジェクト]

原 瑠璃彦

1988年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程在籍、日本学術振興会特別研究員。専門は日本の庭園、能・狂言。特に、両分野における原型的な海辺の表象(洲浜)の系譜の研究を行う。また、坂本龍一+野村萬斎+高谷史郎による能楽コラボレーション「LIFE-WELL」(2013)、平井優子「猿蓑-The face of strangers-」(2014)などの舞台作品においてドラマツルクを担当。

千年村プロジェクト(千年村運動体)

全国の千年以上存続している村(千年村)の収集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして始動したプロジェクト。建築史学、建築デザイン、社会環境工学、造園学、景観デザイン、民俗学、歴史地理学、ウェブデザインに携わる研究者・実務者らが参加。早稲田大学の中谷礼仁研究室、千葉大学の木下剛研究室、京都工芸繊維大学の清水重教研究室を中心に東日本大震災後に決起し、2014年度より本格的な組織活動をおこなっている。

<http://mille-vill.org/>

- B | フューチャー・パート

YCAM InterLab

山口情報芸術センター[YCAM]に附属する研究開発チーム。主にYCAMが委嘱作品として発表するインスタレーション作品やパフォーマンス作品などの技術的な開発をおこなっている。また、これに関連してメディアテクノロジーを芸術表現へ応用するための研究もおこなっており、国内外から研究者を招聘する共同研究などにも積極的に取り組んでいる。

<http://interlab.ycam.jp>

ムン・キョンウォン+YCAM

プロミス・パーク・プロジェクト [リサーチ・ショーケース]

2014年11月1日[土]–2015年1月11日[日]

山口情報芸術センター[YCAM]ホワイエ

「プロミス・パーク・プロジェクト[リサーチ・ショーケース]」は、2013年に開催した国際グループ展「art and collective intelligence(アート・アンド・コレクティブ・インテリジェンス)」(以下、a2ci)展にて制作・公開を行った、ムン・キョンウォン(韓国)の「プロミス・パーク」を新たに展開するために、YCAMが中心に行ってきたリサーチの成果を紹介するものです。2015年、リサーチ・パートと新作インスタレーションを合わせた展示として公開する予定です。

[[「プロミス・パーク・プロジェクト」とは]

大規模災害により、近代化によって成立してきた既存の社会システムが瓦解した後の共同体を想定し、現実に基づいたリサーチを元に、近未来における「公園」の機能や形態、意味を構想するプロジェクトです。

ムン・キョンウォン「庭」

現在では、どのような都市にも存在する「公園」とは本来何か？ 人間、ひいては生態系にとってどのような意味を持つのか？ 本来、「囲われた空間」である「公園」の、人や物が交わる公共の場やその境界、または入り口(ファサード)としての側面に着目します。人類の文明と生態系の変容、その遡源のひとつと考えられる「庭/庭園」からの移行と跳躍、私的空間と公共空間の差異と関係、それにまつわる歴史的な事象を参照しながら、YCAM InterLabが中心となり、テクノロジーの進展がもたらす人間と技術、公共圏と私圏の境界の変質、もしくは消失について、「未来の公園」の手がかりになるような基礎的な技術研究を紹介しながら検証していきます。

ムン・キョンウォン「庭」

[a2ci展(山口情報芸術センター[YCAM]、2013年)での作品展示]

ムンは、a2ci展にて、建築家、景観設計家、植物学者と共に、災害などにより崩壊した2070年の社会を想定して、「未来の公園」の構想を作り上げました。そして、高層ビル上で隣接接合し、そこで新たな生態系を表現する床と壁面の2つのスクリーンにプロジェクションされたリニアな映像作品として公開しました。本展では、このプロトタイプの作品をベースに、「公園」、その遡源のひとつである「庭/庭園」について焦点をあてることで、既存の社会基盤が崩壊した状況で、人類が持ち得る自然観、都市観、公共性について考えます。

ムン・キョンウォン「庭」

ムン・キョンウォン
ソウル(韓国)生まれ。梨花女子大学校卒業後、カリフォルニア芸術大学にて修士号取得。文学的なアプローチの映像やインスタレーションなど、様々なメディアを通して作品を発表。ソウルスクエアのメティアキャンバスなど、パブリックアートプロジェクトでのインスタレーション展示もおこなっている。主なグループ展に、ドクメンタ13(2012)、光州ビエンナーレ(2012)、シンガポールビエンナーレ(2013)、福岡トリエンナーレ(2014)、モスクワビエンナーレ(2010)、南京トリエンナーレ(2008)、ナムジュン・パイクフェスティバル(2008)がある。近年は、ソーシャルプラットフォームを創造することを目的とした、チョン・ジュンホとのコラボレーションプロジェクト「News From Nowhere」に注力し、2013年にシカゴ・アート・インスティテュート内のサリバンギャラリーでの展示をおこなった他、2015年には、チューリッヒのミグロス現代美術館や、ベネチアビエンナーレ韓国館の代表作家として展示を予定している。

www.newsfromnowhere.kr

A|アーカイヴ・パート

アーカイヴ・パート「未来の公園」

アーカイヴ・パートでは、「未来の公園」について考える上で参照とする、文化史、民俗学、建築史、芸術史、メディア史などの歴史的な事象について、3つの異なる研究事例を列挙して紹介します。

A1|St.1.0——《庭》の石から公園へ
原 瑠璃彦(東京大学、日本学術振興会)

1つ目の事例では、通常、公園の祖型と考えられる庭園のみならず、自然や都市における様々な場をも視野に入れ、その両者における「石」に注目し、日本古来の「公園的」空間の系譜を探る試みを展開します。人は、庭園という閉ざされた空間に、理想的な自然風景をつくって生きてきましたが、日本の庭園の要にあるのが、石を立てることでした。石を立てることをめくっては、縄文時代、人々が集落の中心に、祭祀の空間や集合墓地として作り上げていた環状列石にまで遡ることができ、これらは、そこから見える山々の風景や天体の運行との密接な関係を持っていました。一方、かつて、道と道が交差する辻のような境界の領域は、「市の庭」という、様々な人が往来するとともに、商品交換や芸能、占術といった多様な活動が行われる、日本古来のオープン・スペースとも言うべき場でした。そのような空間にも石が置かれ、その場所を守護し、邪悪ものの侵入を防ぎ、また、子孫繁栄、商売繁昌を保証する神として崇拜されました。これらの思考を背景に、プレゼンテーション1では、庭園と環状列石を同一平面上に置き、それらの石の配置と周囲の山勢との関係を探るシステムを公開し、プレゼンテーション2では、庭園の外における、石と人々の生との関わりにより徹視的にアプローチするため、山口市内における様々な石をめぐって行われたフィールドワークの成果を多角的に提示します。

- プレゼンテーション1: 立てられた石と周囲の山勢

- プレゼンテーション2: 山口市の石アーカイヴ

A2|千年村プロジェクト
千年村運動体

2つ目の事例として、早稲田大学の中谷礼仁研究室(建築史)、千葉大学の木下剛研究室(造園・ランドスケープ)、京都工芸繊維大学の清水重敦研究室(都市・建築史)などが参加する活動組織により運営される「千年村プロジェクト」を紹介します。〈千年村〉とは、千年以上にわたり、度重なる自然災害や環境変化を乗り越えて、同じ地形を維持しつつ、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域のことを指します。「千年村プロジェクト」は、建築史学、建築デザイン、社会環境工学、造園学、景観デザイン、民俗学、歴史地理学、ウェブデザインに携わる研究者・実務者が参加し、自発的な意思によって運営される調査・研究のためのプラットフォームです。ウェブサイト(<http://mille-vill.org/>)では、詳細調査事例や、地質図、航空写真、迅速測図を含んだ地図上に千年村をプロットして公開することで調査過程をオープンにしているほか、本展では、千年村を集落上空から撮影した映像資料の公開をおこないます。過去千年以上に渡り営まれた集落を分析することで、千年後の共同体の在り方について予見するひとつの手がかりになると考えます。

- プレゼンテーション1:千年村データベース(ウェブサイト)

- プレゼンテーション2:千年村調査資料：| 01.集落の上空映像/ 02.調査報告書

*本展会期中に、山口市内の千年村について、千年村運動体によるヒアリングや詳細調査をおこなう予定です。

A3|1973年のニューヨーク、セントラル・パークを辿る
西 翼(アシスタント・キュレーター、YCAM)

3つ目の事例は、近代的人工都市の最先端事例と見なされるニューヨーク/マンハッタン島と、その中の疑似自然ともいえるセントラル・パークの歴史と分析を取り上げます。目まぐるしく変化し続ける自然環境と人との関わりを考えるために、アーティストのロバート・スミッソンは都市型社会における「公園」、セントラル・パークに関する論考を残しています。セントラル・パークは、人

工増加の著しい19世紀後半のニューヨークで、造園家のフレデリック・ロー・オルムステッドらにより設計された都市型の公園です。オルムステッドは、数百万年前の氷河期に地形が受けた影響について調査した上で、造園設計をおこなったといわれます。スミッソンは、このような過程を経て設計されたセントラル・パークを、環境変化や人為の介入が交錯する場所として捉え、絶えざる変化の過程の堆積に興味を示しています。スミッソンの論考を元に、オルムステッド、スミッソン両者の思考を辿りながら、地勢、自然環境の変化、それに内包される人々の営みの変化と都市空間の変遷、それらの総体としての「公園」を、空間と時間の2つの側面から読み解きます。

AからBへの接合|芸術史にみられる空中庭園、浮遊する空間
阿部一直(チーフ・キュレーター、YCAM)

芸術史の中で「公園」は、まさに百花繚乱のように多彩な事例が現れます。このパートでは「公園」という「囲われた空間、囲う行為」という特色が担う象徴性や特異性が、芸術表現の中でどのような世界観と関係付けられていくのかを考えます。そもそも「公園」が、庭園を経由して、現世から隔絶された楽園(理想郷)のイメージとどこかで通底していることは、古今東西のどの文明史においても見い出すことができます。囲われた圏域を生み出すことで、公共空間でありながら、「公園」が外部の周囲の環境や文脈を異化する存在であり、内部では視線や知覚を変質させる仮想性や跳躍性を生み出していることが考えられます。「公園」と「公園」以前を隔てるイメージの境界とは何なのでしょう。人類学者レヴィ=ストロースは、古代的な祭祀の象徴性が安定した「冷たい社会」と、それが瓦解・変性されるいわゆる近代の「熱い社会」の対比と断絶を指摘していますが、芸術表現においては、囲われた場=ゾーンとしての「公園」の別世界性や浮遊性がさらに強調され、近代的なパラダイムの中においても、「熱い社会」の渦中にありながらそれを逸脱する記憶の混淆として、「冷たい社会」の祭祀的秩序が回帰する空間を内部に召還させていくのではないか、という仮説をたてていきます。

B|フューチャー・パート 未来の知覚——人間と技術の境界
YCAM InterLab

「未来の公園」は、技術の進展による共同体と個人、人間とテクノロジーの境界の変化に無関係ではありません。ネットワークに常時接続されたコンピューターを身体の一部のようにまとい、高度な人工知能が人と対話し、現実空間とバーチャルな情報空間が境目なく、人間の意識の中で接合される社会はすでに現実のものになりつつあります。また、心拍、筋電、脳波などの生体情報のセンシングの発達、クローン技術や遺伝子操作などのバイオテクノロジーの急速な進化により、人間以外の、その他の動物、植物といった生命体も、工学技術と高度にシームレス化した状態で接合しようとしています。このようなテクノロジーとネットワーク化した社会の高度な融合と進展が、人と技術の境界を限りなく消失に近づける一方で、また逆に予想を超える新たな境界を生じさせることでしょう。このような状況下で、都市空間において、公共と個人が接続する「公園」について、人と技術の境界が変質したとき、困み込まれた場である「公園」の在り方や、また「公園」がいかに内在化される可能性があるのかを論点に、YCAM InterLabが開発した技術を紹介しつつ検証していきます。

- プレゼンテーション1:TECHTILE(テクタイル)

- プレゼンテーション2:RAM

*会期中、以下の日程で、デモンストレーションをおこないます。

土曜日 隔週 (1月のみ変更)、14:00–

2014年11月8日、22日、12月6日、20日、27日、2015年1月4日、10日